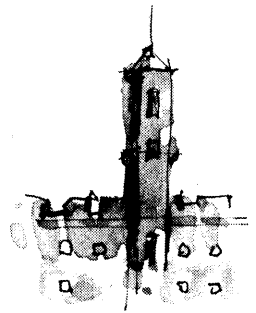


お母さんに語る

―園長として最後のお話



周 郷 博

ちょうど私が園長になったのは一九六九年で、学生紛争がまだ盛んな時期でしたけれども、したがって、教育というものは今の状態ではいけないので、もっと大きなスケールで考え直さなければいけない、(ドゴールがそういったように) そういう時期にぼくは幼稚園の園長を兼任ということになったわけです。

そして四年間たつてしまいましたけれども、ひとことといえ、やるべきことを、ほとんどやれないでできてしまったと思います。というのは、制度とか、先生とかいう問題はなかなか動かしがたいですね。それから、ぼくはやっぱり、今のような時代、このままではいけないとわかっていながら、人の心を動かす、というような心をこちらがもつこともむずかしいんですけれどもそんな生半可なことをいってもしようがないですから……。人の心を動かすということがむずかしい時代になりましたね。これはお互いさまなだけけれども、みんなこう人の心が

わかってくる喜びというよりも、つっぱってるかたきの方が強くなっています。だから、この幼稚園のスタッフ全体でどういうことを考えて、実行していくかということについては、ぼくはわずかしかできませんでした。

しかし、絶対にぼくがほこりに思っていることは、人にも少しばいろいろな機会に話すことですが、四年の間にお母さんたちがよく変わってくれたな、と思つて、これはぼく自慢にしています。変わってくれた、というのは何も、必ずしも悪くも、良くもお母さんたちの心が非常に……。いい方がむずかしいですね。私のいおうとしていることはわかっていくということ何か自慢しているように聞こえますが……。わかるということ、わかる人のなかにすでに半分以上わかっていなければ、あつる人のいっただことはわからないわけですからね。だから、むしろ内因的なものはお母さんの方にあるわけなんです。

で、お母さんたちを通じて子どもたちが、ぼくが何かの機会にいったことなんか、お母さんが、あ、今日はこういうことをきいたけど、こういうことはいいいことだったなあ”なんて思っていると子どもの方に自然に伝わってくるのね。そういう関係で、その点が自慢できるわけなんです。

そしてもう一つ、お母さんたちの、物の見方、きき方っていうものは非常にすがすがしく成長してるっていうことと、あわせて「つぼみ」というこのお母さんたちの作っている雑誌も、今までのうちで一番いいものができました。これは、ぼくのおかげじゃなくて、そちらのせいなんですけれど……。

そういうことで、皆さんに感謝したいと思います。そこに、やめる喜びがあります。単に事務的に四年間いた、単に管理者として四年間いたというのではないという喜びがあります。これはそちら側に感謝するべきことだと思います。そしてもう一つ、四年間を省みると、ともかくぼくは無茶苦茶にどうしたらいいのか考えてきましたね。そして、無茶苦茶にいろいろな本を読みました。(日本の本はあまり読みませんけど)どうにもぼくはね、日本の本を読むより外国の本を見る方が頭がはつきりしてくるの、これはえらぶっていつてるわけじゃないんです。何でいっても日本で今出ている本は商売、一時的な商売と関係がありすぎます。もうちょっと大きな時間と空間のスケールで考

えていくということがなすすぎるんですね。

吉田一穂さんのこと

で、やめる間に、つい最近三月一日に吉田一穂という詩人がなくなりました。私は吉田一穂と親しくなったのは一九四四年のちょっと前、日本が敗戦になる前、ぼくが戦地に送られて行く前に親しくなったわけです。で吉田一穂はずっと、そのころの吉田一穂のぐいばりは空に」という童話があるんですけど、それをぼくが解説した、その文章を大事にとっておいてくれました。そのころからの親しい詩人でしたが、そのちょっと前に初山滋という画かきが、うちでたき火をしてて着物に火がもえうつつで、大やけどをして、肺炎をおこして死にました。

私は一年生の合宿というのを三月一日、二日とやっています、八王子の大学セミナーで。そこへ電話がかかってきました、吉田一穂さんが一日の三時になくなったといってきました。それで二日の日にお通夜に行きましたが、誰もいなくて長女の人が一人いました。世間の人は吉田一穂という人をあまり知らないでしょ、死んでから新聞やなかで、いかにすぐれた日本の高貴な精神であったかということを書きましたけれど……。

〔東洋と西洋と哲学及び自然科学における一つの発見者……とくにかくれた地質学者であり、天文学者で……この人が詩生

活をせず自然科学をやっていたら、ノーベル賞に値する何か原理を発見したかも知れない……」と西脇順三郎氏も書いた。

それで 吉田一穂の住んでいた部屋で長女の人と話をしました。それは玄関を入ったところの三畳間なんです。この三畳にずっといたわけです。その部屋も、ぼくが前によく行ったところは雨もりがして、夜、話していると吉田一穂さんのすわっている座ぶとんがぬれてきたりしましてね。しかしその前は、星が見えてたんだなあ。その三畳の部屋で、吉田一穂はキチーンとすわっていました。北海道の生れなんですけどね。何しろ、吉田一穂は病院に入ったことが死ぬ原因であったような気がします。だって吉田一穂は水道の水は飲まないの、ああいうけがれたものはのめないって、わき水をくんできて、魔法瓶に入れてそれしか飲まなかったんです。病院に入ったらそういうわけにいかないでしょ。

それから、お金も何もありませんけど、吉田一穂という人はどうもヨーロッパ人の心をもっているんです。お酒やなんかも世界中の第一級のものしかのまないんです。洋服なんかもってなくて、どこかへ行く時は借りてくるんですけど、……。そして着物を着てるんです。そして子どものようなところがありましてね、あんな純粋な人はいません。ぼくは学生を二人ずつ、二度連れていったことがあるんです。すると、夜話していると十

一時すぎますね。そして学生が、先生、もう十一時すぎだからなんていうでしょ、吉田一穂は「まだいいじゃないか」、そんなことはいわないんです。そんなケチなことは、全然いわないの、きいてないみたいなのに、もっとおもしろい話を始めるの、その話が宇宙の話とか、実に広大なの。そしてまた、もう一辺ぐらい「もう十二時」なんていうでしょ、全然きいていないんです。

そして吉田一穂という人は、もってる物をみんなあげちゃうんです、人に。自分は何ももっていない人です。この「古代緑地」っていうエッセイなんですけれど、ぼくはついにこれをもらってこねました。その内に今年中に長男の八峯さんという人が十巻、詩と評論と童話、(童話っていうのは、自分の子どもが小さい時に自分が話してきかせた、きかせるために書いたものです)を出すそうです。いつもお金がないんですからね、いつもいつもかすみを食ってたわけです。

吉田一穂の弟子っていうのは、詩の弟子っていうても単なる詩人じゃないんです。吉田秀和っていう音楽評論家、皆さん知ってますね。それから地質学者で井尻正二っていう人がいます。この二人と今井富士雄という三人は旧制高校のころ吉田一穂の家へ行かないと気がすまないくらい行ってたんです。そこで何となく話してたんです。吉田秀和の話していることをきくと、

「音楽は地球の中からわき出してくるようなふしぎな音だ」と
いつているわけです。これ、吉田一穂から来ているんです。ぼ
くはつまり、学校なんでものを仲だちにしないで、この人たち
は、貧乏でお金も何もない、しかし品高く生きていた吉田一穂
の本当の弟子だと思えます。三日の告別式にも人は六十人ぐら
いしかきませんでした。ぼくは考えている内に、吉田一穂とテ
イアール・ド・シャルダンと、考えていることが非常に似てい
ると思いました。

「興奮」するということ

白鳥はなぜシベリヤへ帰るのだろうか、いろいろな渡り鳥も、
なぜ、ああいうふうに行動するのだろうか、今度はそこから、
「本能」とは何であるかという問題になります。意識はしてい
ないが行動するんです。吉田一穂はいろいろな例をあげていま
すが、人間も何かそういうものがあるわけですね。自分では意
識しないけれど、ある人と会うと、何となく「興奮」してきて
すがすがしい気持ちになつてくるんです、理くつでなしに……。
これ、何でしょう？

吉田一穂がいった例は（北海道生れですから）サケが海から
ずっと産卵期に帰ってきますね。川をさかのぼって行くと、昔
すんでいた川底の感触があつて、藻も生えているわけ、仲間も

少し残っているわけ、これ、故郷ですね。この故郷へ帰ってき
たということで「興奮」して卵を生むんだそうです。ところが、
川底を荒らして、藻をとっちゃって、乱獲をしちゃうと、帰つ
てきても「興奮」しないで海へ帰っちゃうんだそうです。これ
理くつじゃないのね。本能的なものなんです。なぜ「興奮」し
てくるのか、セックスばかり考えちゃいけないんで、「興奮」し
てきて、生命を生み出そうというのです。そこでサケは死んじ
やうわけです。死んでしまつてもここで新しい生命を生み出し
たいという「興奮」がおこるのは、故郷へ帰ってきた、という
「興奮」からなんです。今は北海道の川も荒らしちゃいました
から、サケが帰ってきても「興奮」しないんです。そのサケの
「興奮」にあたるものが、人間にもあるわけなんです。何とも説
明はつかないけれど、喜びにみちみちてきて、何かやらないで
はいられないという状態があるわけです。バッハのマタイ受難
曲のある部分をきくと、何か地軸の運動にかえつていったよう
な高い「興奮」、死んでもいい、と思う時があるわけです。

ところで人間は、どこかに故郷があつて、そして今ここにい
るわけです。皆さんそうですね。それは自分が生まれたところ
だけが故郷とはかぎりませんが、何かあるわけです。「そこへ帰
って行く」と「興奮」するわけです。これは週刊誌的な意味と
は違います。しかし故郷へ帰ることができないので、「距離を

感じる」わけです。そこで人間は「考える」人間になり、言葉というものでこの距離の大きさを自分の存在をたしかめようとするわけです。そして詩や文学や思想が生まれてきます。

そこは第二次世界大戦の末期にロンドン郊外でうえ死にをした、シモーヌ・ヴェイユの思想と非常に似てゐるんです。ぼくはその墓をやつと三年前に見つけておまいりしてきました。シモーヌ・ヴェイユは、神さまはが世界、人間、動物をつくつて、遠くへ去つていったのだ。そしてその距離はますます遠くなる、しかし細い糸のようなもので人間とつながっている、つまりディスタンス (distance) です。この神とのふるえるようなつながりを感じる事ができたら、それがシモーヌ・ヴェイユのいうアタンション (attention) 気が付くという、人間が考える人間になり得る、ということなんです。

それでちよつと、そこをひねつていいますけれど、おんなについての本が非常に多くなりましたね。日本では、瀬戸内晴美がこの間本を出しましたけれど、あれは実に大胆な、立派な女性ですね。ぼくはあの人には会つたことはないけれど、娘っ子はよく知つてゐるんで、離婚したことを大いにほめました。離婚してそれでおしまいじゃしょうがないけれど、一生束ばくされてゐるよりも、やるべきことがあつて離婚するならば、意義があると思います。人生は何も束ばくされて一生を終わらな

ければならないほど、中味のないものではないはずですよ。本屋に行つてごらんさい、瀬戸内晴美とか曾野綾子とか、ほんとうに「おんな」の本、講座「おんな」というのまで出てますね。日本じゃまったく、女というのは大問題らしいですね。しかしジャーナリスティックな扱いでこうなつてゐるらしいですけど……。

女つていうのは中国の考え方からいくと、「大地」や「水」みたいなものです。「大地」、つまり「故郷」です。いい女性と会うと、故郷へ帰つてきた、つていう感じで男が「興奮」します。ところが、この「興奮」がなくなつてきたんじゃないですか、すると何かこう変な技巧をこらすわけです。公害がひどくなつてますます女の価値は大きくなる、故郷に帰つてきたなあという女に会うことが大事になってくるんです。そうでなければサケのように「興奮」がわいてこないんです。

Zero Population Growth 人口増加率ゼロという映画

「赤ちゃんよ永遠に」という日本の題名がついていますが、どうしてこういう日本名をつけるのでしょうか。ずい分甘つたらしい方ですが、もとの名前は「Zero population growth」「至上命令」なんです。こういう映画、見ようと思つて入るでしょ、大抵すいてゐます。こういう映画で考えなきゃいけないんです。

「ガガーリンが地球を廻った時の『地球は青かった』という映画、ぼくはあの時代の具合が悪かったけれど、ぼくは何千円、何万円出して見ようと思つて有楽町に行つて見ました。すごくこんでると思つて入つたら三分の一しか入つてませんでした。地球は青かったつていうんでしょ。ぼくは五万円ぐらい出してもいいと思つたのに……。」

で、チャップリンのお嬢さんが、その中の子どもを生んで逃げる人になるんですが、しかしこの映画、人口増加ゼロというこの映画が『赤ちゃん永遠に』なんていうと万々才で何もなしてみたいでしょ？ そうじゃないんです。恐ろしい現実に、われわれはすでに近付いているわけなんです。

一番最初に英語で出てきます。『Attention all citizen、』
『Attention please、』飛行機でいうあれじゃないんです。皆、耳をそばだてて聞きなさい。全市民に告げる、というんです。地球上全人類が相談してもはや人口をこれ以上ふやしたら、(紀元二〇〇〇何年かの一月一日なんだけれど)人口がすでにふえてしまったので危険なんです。そうすればそれだけ食物をへらし、空気もよごすわけです。酸素が少なくなつてますから、みんな変になつてるんです。それは、真鍋博さんもいつてますけれど、SFでしょうか、それとも現実でしょうか。犬とかカナリヤとかいろんな動物は生きてると困るから殺しちゃつて

の。わずかに、人間が生きるのに必要な生物と植物を残している。特に植物は大切にされて、切つたりしたら、つかまつてしまふの。いろんな動物はただ製として残っているだけ、一九七八年ごろはまだこういうものがいたというわけです。そして映画なんかには、一九七八年ごろには人間はこういうものを食べていた。たくさんたべてその結果こんなになつたとつてあるけれども、『』はチューブなんかでわずかに食べているだけ、すべて思い出なんです。

どうも日本の人は、これは人類全体の問題であつて同時に日本人の問題でもあるということを感じない。ふしぎなところがあつて思ふんですけれど……。

人口爆発といいますがね、一九六四年から六六年までに人口は七千万人ふえているんです。にもかかわらず食糧はふえていないんです。どこかでうえ死にしなければならぬ、それなのに経済大国日本では昔の人より余計に食べすぎています。その上むだに食べてごみを出している、これでいいでしょうか。人間としての感覚の問題です。

男と女というのは、子どもをうむために、子孫をふやすために結婚をし、お嫁さんはまた働き手としても来たわけです、夫婦というのは、子どもを生むために、子どもを生むことで女性の価値が認められていたわけです。男性と女性の結合は子孫を

絶やさないうためにあったわけですが、ところが今、子どもを生むということが、むしろ西丸震哉さんのように、生まないとか、この環境だと、生んでもできそこないになる危険があります。そして親たちも何となく本能的に不安なものを感じてますから、子どもの心を理解するっていうことができないんです。

すると、子どもを生むだけが男性と女性の結合の価値でないとしたならば、男女の性関係というものは興奮してこないんだそうです。そして技巧的に興奮状態を作らなければならぬというのが場面に出てきます。しかしすでにこれも現実になるんじゃないでしょうか。しかもそういう技巧によって性というのが、むしろ喜びを失なっていくというふうに、今、なりつつあるのだと思います。

むすび

愛し合うということはどういうことかという点、昔と違ってきたんです。男と女・男と男・女と女でも種としては同じでも人間はすべて違うものです。これが友情で協力する場合、お互いがすべて違うために、この結びつきが創造の原動力になるわけです。単に子どもを生むという、性行為を中心としたものではなくて、男性と女性が本当に理解し合って協力する。それが夫婦なんだと思います。そしてこの二人の協力によって環境や、

自分の子以外の子どもたちをも、健全な人類のあとつぎとして育ていく。これからの男と女が愛し合っていくことは、そういう姿でなくてはならないと思います。男同志、女同志でも協力してきたわけです。協力することを意識しないで、吉田一穂とぼくは協力しました。

男と女は全然違うものですから、どっちかがどっちかのどれいになるなどというのではないわけです。子どもを生むことだけが主たる問題であればそれもかまいません。そうじゃなくて、これからの恋愛、結婚は、単に一時的なセックスに逃れるなどというのではない。それがテイアール・ド・シャルダンのいっている「Love」というものの「進化」なのです。Loveは長い間、子孫を残すということにおいて価値を認められ、これをとってしまおうとセックスの技巧になってしまっただけです。またならしくなってしまう。肉体的なものには依然として中核をなしますけれども、その「進化」の姿というものは、男性と女性が協力して、結婚しなくてもその協力によって世界は変わるんだと、地球全体の人口爆発、学校爆発による教育の弊害に立ち向かわなければならぬ。

この中で中核になる問題は、やはり男女が愛し合わなければいけないことです。結婚をして法的に認められているから、男女はどんなに性的技巧をこらしても罪にはならない、と

いうことはないと思います。結婚していても、また見知らぬ同志でも、男であり女であるということは、人類の未来を見とおして協力するという姿でなければいけない。このところを理解する。理解するということは何かの形に行動に表われるということだと思えますが……。

釜ヶ崎のエリザベス・ストロームさんが書いてますけれども、小さい子どもは哲学者です。哲学者だけれどもまだ世の中をよく知らない。ですからお金とか食物で簡単にだまされてその内に哲学者じゃなくなってしまう。あんまり食べさせちゃいけないんです。食物で詩人であり哲学者である子どもを誘惑しちゃいけません。しかし問題は、これから人類が生きるとすれば、日本にとって一番必要なのは、哲学、現在は、ゆたかな楽な意味での哲学が欠けていると思います。しかしお母さんたちは、哲学なんて言葉を使わないで、サケみたいな、サケの例で感じることができるような、故郷、命を生み出すもの、ぼくは今畠で仕事をしていますけれど、大地や水はあらゆる生命を育ててそして、おれがやったんだという顔はしません。その大地のように、子どもやだんなさんを「興奮」させる、非常にいい意味で「興奮」させて人間の能力を発揮させて、それを自分のおかげだ、などといわないでやらなければいけない。というのは、これは男にはできないことです。

私はこれで大学をやめますけれど、三日ぐらい前から実感ももってきました。忙しく暮らしてきて、自分の考えがはっきりしませんでしたから一年間はどこへもつとめないで 中国やヨーロッパに行つて、日本を離れて日本のことを見たいと思つています。

昨日も山で掃除していましたが、掃除していると部分的ですが、生きかえつたような気がします。杉の葉の枯れたのやなんかを、前は熊手でとってきたんですけど、手でそつととつてやると、しだやなんかがとても喜ぶ、「ぼく生きててよかった」なんてしだがいつてるような感じでした。森の中に行くと、春の日ざしが木立の間からずつとさして、ステンドグラスの大伽藍の中に見えるような感じになりました。ああいうのがぼくには一番あつています、お金はなるべく使わないで（笑い）勉強したいと思つてます。

（三月九日）